

書評：

村岡到（2013）『友愛社会をめざす〈活憲左派〉の展望』ロゴス

西川伸一

筆者は新左翼の活動家出身で、いまは小さな出版社を営むかたわら活動も旺盛に続ける古稀に達した現役闘士である。五〇年に及ぶ活動を重ねる中で、日本左翼とマルクス主義の悪弊・限界を痛感し、その突破を目指すようになる。そして、「自分の頭でしっかり読んで理解してから批判」することを信条に、独自の言葉を次々に提起して左翼の「作風」を乗り越えようとする。本書では、一九八〇年代に創語した「平和の創造」から最近の「法抛統治」まで二六の言葉が取り上げられる。それが本書前半の「創語録」をなしている。

たとえば、「平和の創造」も一九八〇年代に筆者が言い出した（湯川秀樹も使っていたことにあとで気づく）。字面だけみると、別に新しさは感じない。しかし当時の左翼の文脈では、斬新な言葉遣いだったのだ。共産党は「平和擁護」を用い、対立する新左翼は「反戦」を掲げた。「その対立を突破する」言葉として筆者が思いついたのが「平和の創造」だ。

「法抛統治」もおもしろい。「法の支配」がふつうの言い方だが、「階級支配」がお好みの左翼は、これを嫌ってきた。「万引きしてもいい」式の法を軽視する「作風」の源泉だ。しかし、法に依拠した統治は人類の叡智である。筆者はここでも「架橋」を試み「法抛統治」を唱える。「近代社会の政治システムは、「階級支配」ではない」ことに目覚めよと呼びかける。

本書のタイトルにもなっている「友愛」は、一般には「自由、平等、友愛」とセットで語られることが多い。「序章〈活憲左派〉の出発」でその意味を説明している。左翼は「友愛」を忌避していたが、党派对立を激化させてきた。内ゲバをみよ。しかも「友愛」は資本制経済の利潤追求の目的とは相容れない。なので「そこには資本制経済を超える契機が内在している」のである。

何気なく読み飛ばしてしまう一語一語に、実はその組織の姿勢なり方針なりがにじみ出ている。筆者は党派の綱領や機関紙からそれを入念に読み込み、本質を鋭利にとらえきる。この研ぎ澄まされた言語感覚は、若い頃から文字どおり人一倍読書に励んできたことから育まれたのだろう。とりわけ、マルクス主義哲学者の梅本克己や法学者の尾高朝雄に大きな影響を受けたという。本書の参考文献には一六〇冊が挙げられている。

本書後半の「回想」は筆者でしか書けない戦後日本左翼史である。その抜群の記憶力に舌を巻いた。

新潟県長岡市で安保闘争の洗礼を受け高校を卒業したあと、筆者は活動家を志して上京する。最初の職場は東大医学部附属病院分院である。新左翼党派の中核派に入り幹部の清水丈夫の「一の子分」となる。革マル派に鉄パイプで足の骨を折る内ゲバも体験し、内ゲバに原則的に反対する第四インターに移る。ペンネーム「村岡到」が誕生する。機関紙の共産党批判担当となり、当時は共産党員で現在は民主党参院議員の有田芳生とも知りあう。

第四インターを五年で抜けた後はどのセクトにも属していない。筆者自身が政治グループを立ち上げたり、研究者を組織したりと独自の歩みを続けている。その間単著を二〇冊ものし、ジャーナリストの深津真澄氏やユーゴ研究の第一人者岩田昌征氏をはじめ、交流範囲も広い。

「事件の真相は深層にあり」として、筆者はいくつか裏話を披露している。一九六七年一〇月のデモの渦中で中核派の京大生が警備車両に轢かれて死んだ。実は警備車両の機動隊員が車両のカギを放置して逃げ、それを学生が運転したというのだ。中核派は警察が轢いたと宣伝するし、警察はカギの放置を認めるわけにはいかない。両者の「奇妙な「共犯」」が成立していた。

私も現場にいた一件も出てくる。ソ連崩壊後、社会主義理論学会の解散がある委員から提案された。筆者は「「意図的な」会員アンケートを作り」解散を阻止したという。そこに同席していた私は、そんな策動があったとはつゆ知らなかった。だから左翼というのは油断できない！

私は筆者を「寅さん革命家」と評したことがある。毒は吐くが憎めない。われながらぴったりのニックネームだと気に入っている。